

1833年(天保4年)加賀藩輪島町における津波被害について

—能登輪島住吉神社文書を中心に—

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科* 大林 綾

Damage of Wajima-machi by the Tsunami strike in 1833

Aya OBAYASHI

Graduate School of History and Folklore Studies, Kanagawa University,
Rokkakubashi 3-27-1, Kanagawa-ku Yokohama, 221-8686 Japan

This paper discusses the social responses against the damage by the 1833 tsunami accompanied to the earthquake which stroke Wajima-machi (now Wajima-shi, Ishikawa prefecture). Wajima-machi, consisting of four small towns, was ruled by Kaga-han in Edo period. The damages of four small towns were deferred due to their topographies and their residential situations. This paper explains concrete analyses of the social conditions which has differentiate various responses and recoveries of each town against the natural disaster.

§1. はじめに

1833年12月7日(天保四年十月二十六日)午後2時頃(昼八ツ時), 現山形県沖を震源とする地震と, それに伴う津波が発生した(以下, 天保四年羽前沖地震と称する)。「新編日本被害地震総覧」によると, この地震の震度は5~6, M7.5と推定される。「加賀藩史料」には, この地震によって引き起こされた津波の状況が次のように記録されている。

資料1.「加賀藩史料」[輪嶋并近浦津波一件]

(前略)同日八ツの下刻地震大にして, 久しく震動仕申候。然ども半時には過不申。地震の後風止て, 海面白く高うねり波而已にて御座候。然処七ツ時に至り, 何となく俄に満汐大波のごとく, 濱かしら或は家居までもうち上, 夫より汐引出申処, 凡五六町ばかりも引汐仕申候。尤汐の干あがり, 濱となり候所は三町計にて御座候。扱又汐之引行候事甚はやく, 川の瀬のごとく鳴候て引申候汐引詰候て後, やゝ淀有様に覚申候。五, 六町沖にて波を畳あげ, 其高事山の如くに相成申候。それより寄来事是又甚はやく御座候。波止場ぢかくなり候波の高さ凡四間計うちあげ候。波の際限所々不同有之, 川込凡十町ばかりにて御座候。(後略)

この記述によれば, 地震の後, 半時もしないうちに

風が止み, その後波高約7.2mの津波が輪島沿岸に到達し, 河原田川(近世には大川と呼称)を約1kmにわたって逆流したことが知られる。この資料1には, 津波前に見られる引潮についても克明な記述がなされ, 600mほどの引潮が発生し, 300m以上が干上がって浜となり, また, その引潮は, 急流の側にいるような音がしたという。この強大な津波に襲われた輪島町は資料中に「濱かしら或は家居までもうち上」とあるように, 津波とその引潮による家屋流出をはじめとする被害に遭遇することとなった。また, [春藤鳳兮(しゅんとうほうけい)閑時随筆](「加賀藩史料」)に「輪島近き海辺に, 誰とも知れず死にたる人々菰など着せて有りしが, いと哀むに堪へたり」とあるように, 人的被害もまた甚大なものであったことが伺えよう。

このような被害を輪島町に及ぼした, 天保四年羽前沖地震については, これまで宇佐美龍夫(1975, 1987, 1996), 萩原尊禮(1982), 渡辺偉夫(1985)の各氏が, 震源の確定, 各地域の震度の推測など, 地震学的な見地からこの地震について検討をおこなってきた。更に, 牧野義照(1990), 佐古隆(2001), らは, 主に能登輪島住吉神社文書(以下, 文書番号を, 住吉…号と表す)を中心に, 輪島町域の災害として地震・津波を位置づけ, 「輪島市史」においても, その被害状況がとりまとめられている。けれどもこれまでの諸研究では, 地震及び津波での被害実数を住吉神

* 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1

表 1 輪島町各町被害状況
Damages of each town of Wajima-machi.

	鳳至町		河井町		輪島崎村		海士町		合計	
総家数	505		709		115		130		1459	
流出	101	20%	29	4%	53	46%	24	18%	207	14%
皆潰	18	4%	81	11%	12	10%			111	8%
半潰	25	5%	18	3%			11	8%	54	4%
土蔵納屋	84		49		16		5		154	
溺死人	15		25		6		1		48	

(註 1)家数, 土蔵納屋の単位は軒, 溺死人の単位は人である。

(註 2)「加賀藩史料」, (住吉 G-98 号), 佐古隆「住吉神社文書から一天保四年の輪島」から作成。但, 史料により若干の数の差異があるため, 最大値を利用した。

(註 3)表中の%は各被害戸数の総家数に対する割合である。

(註 4)なお, 近世において輪島町は, 鳳至町, 河井町, 輪島崎村, 海士町の三町一村を総称して輪島町と呼ばれた。そのため, 被害状況も町村ごとに記録が残されている。

社文書や加賀藩史料等から掲げることとなり, その被害状況や, 特に復興の様相を輪島の「町」という場と照らし合わせ, 更にその災害への町としての対応を事例として積み上げるという段階には至っていない。

そこで本稿では, これまでの諸研究に学びながら, 天保四年羽前沖地震の詳細な被害, 特に各町内部での被害の状況を把握し, さらにそこからの復興の過程を, 被災者の持つ職掌・生業という観点から考察を試みたい。それは言い換えれば, 災害からの復興という側面から, 近世社会・地域社会における「町」の有り様—「町」のもつ性格—のひとつを浮かび上がらせることになると考えている。

なお, 近世において, 輪島町は所口(現石川県所口町)に次ぐ規模の町場であり, 町に順ずる扱いを受けているが, 行政上は「村」と制定されている。しかし, 本稿では, 輪島という地域の持つ特質が, 「町」でありまた「都市」と考えても遜色のないものであると考え, 広義に解釈した「町」としての, 輪島の復興のあり方を探っていく。

§ 2. 輪島町の被害概況

§ 1 で掲げた, 資料 1 には地震の揺れそのものについては, さほど多くの記述はなされていない。それは, 表 1 中, 特に鳳至町(ふげしまち), および輪島崎村にその特徴が顕著であるが, 輪島町においては, この天保四年羽前沖地震では, 津波による被害が甚大であったためと考えられる。「日本被害地震総覧」

には, この地震による各地の被害状況が取りまとめられ, それによると家屋の流出被害は, 震源に近い油戸〜鼠ヶ関間が 150 軒, 佐渡で 79 軒が顕著な数となっている。これに対し, 輪島町は「流出」家屋が, 207 軒に上り, 他地域よりも津波による被害が大きかったことがうかがわれる。

本章ではまず, この地震が輪島町全体に与えた被害の概況を把握しておきたい。

天保四年, 輪島町全体の家数は 1500 軒近くに上り, 日本海側の一大港湾都市として, 様々な交易, 諸商売が行われ, いわゆる北前船に代表される日本海交通の拠点となっていた。特に輪島崎村は, それら諸船が集う輪島港を擁し, 日本海に張り出した地域であったため, 天保四年羽前沖地震による津波に最も早く遭遇し, 流出家屋の割合が被害家屋の半分近い高率となっている。また, 鳳至町, 海士町も, 津波による被害が総家数の 2 割近くに上り, 全体として地震による倒壊被害よりも, 津波による流出被害が大きかったことが判明する。しかしながら, そのような中であって, 河井町は, 流出家屋よりも倒壊家屋の割合が高い。これは図 1 に見られるように, この地震の震源が, 羽前国(現山形県)沖であり, そこから発生した津波は, 越後国(現新潟県), 佐渡島などの沿岸を襲った後, 加賀藩沿岸に北東方向から到達したが, 河井町は輪島町の中でも東部に位置したことで, 津波と直接接触していないことがその理由として挙げられる。しかし, 鳳至町は, 輪島崎村, 海士町よりも内陸

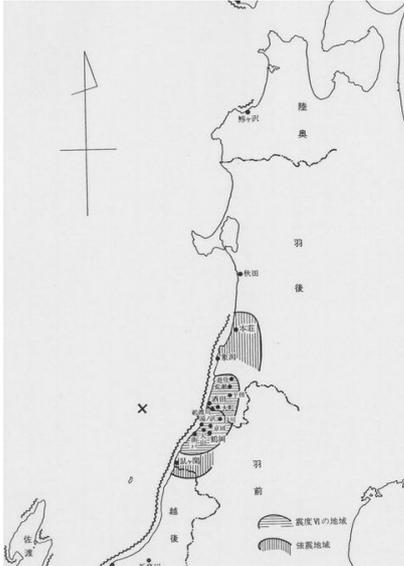


図1 天保四年羽前沖地震震源地
The Hypocenter of earthquake of 1833.

(註1)「新編日本被害地震総覧」, 110p から抜粋.
(註2)加賀藩領はこの地図には現れていないが, 本図の左下, 南西方向にあたる.

表2 鳳至町被害状況
Damages of Fugeshi Town.

鳳至町被害状況		
総家数	505 軒	
家屋被害総数	144 軒	
皆潰流出	101 軒	百姓 7 軒
		頭振 86 軒
		貸家 8 軒
皆潰	18 軒	百姓 1 軒
		頭振 17 軒
半潰	25 軒	百姓 4 軒
		頭振 21 軒

(註1)「加賀藩史料」, (住吉 G-104 号)から作成.

に位置し, 津波に直接接触する可能性は低いにもかかわらず, 流出家屋の被害が大きい. この要因は, §1 で述べた大川の逆流に求められるが, ではその被害の実態はどのようなものであったのだろうか.

次章では, この鳳至町の津波流出被害, そして鳳至町・河井町の被害地域の確定とその地域による差異について検討を行っていきたい.

§3. 被害者の詳細な把握と被害地域の確定

3.1 鳳至町の津波流出被害

表2には, 輪島町の中で特に鳳至町の被害を集計した. 鳳至町は後述するが, 頭振(あたまふり)(高を所有しない人々)身分の人々が大多数を占める町であった. 高を所有する百姓身分は近世を通し, 鳳至町内で 85 軒に設定され, その他の家々は頭振身分とされる. 輪島町では 1735 年(享保二十年)に 71%, 1843 年(天保十四年)には 85%という高い割合で頭振身分の人々が集住していた(住吉 M-10 号).

この百姓, 頭振の人々は, 近世輪島の特産であった素麺や漆器の生産に携わり, 百姓・頭振の相違に関係なく, 天保十四年の時点では, いわゆる農業に従事した家は一軒も認められない. 彼らは, 商人・職人として町を形成していたのである[泉(1993)]. そのような近世の輪島町構成人員の比率は, 表2において, 頭振身分の軒数が圧倒的なことから明らかであろう.

では, 鳳至町内部での被害状況を見てみよう. 天保四年羽前沖地震の際には, 加賀藩から次の史料に見られるような救済措置が取られたが, この対象となった者達が, まず天保四年羽前沖地震での被災者ということが出来る.

資料2 加賀藩史料 御用儀品々留帳
(前略)

右之津波損家等出来天保四年御救方左に記
三百石 輪嶋両町海士并輪嶋崎村江御救米
但,此御救米被下切也
二百五十一石 右貸米
但,此御貸米年賦返上也

資料2によると, 河井・鳳至・海士・輪嶋崎の4か所に合計 300 石の救米と 251 石の貸米が「救方」として行われたことがわかる. 救米は返済の必要はなく, 貸米も 15 ヶ年賦割という長期に渡る返済が可能とされたものであった. 藩はこの救米・貸米以外にも, 追って「塗物運上」など小物成の 1 年分用捨という措置も取り(住吉 G-106 号), 被災者の救済にあたっている. では, この救助対象者は, 鳳至町のどの地域に居住していたのであろうか.

この被災者の居住地域を確定することは, 地震, 津波によって引き起こされた被害を, 具体的に描き出すことに他ならない. それはまた, 近世の輪島町の様相のひとつを明らかにすることになるだろう.

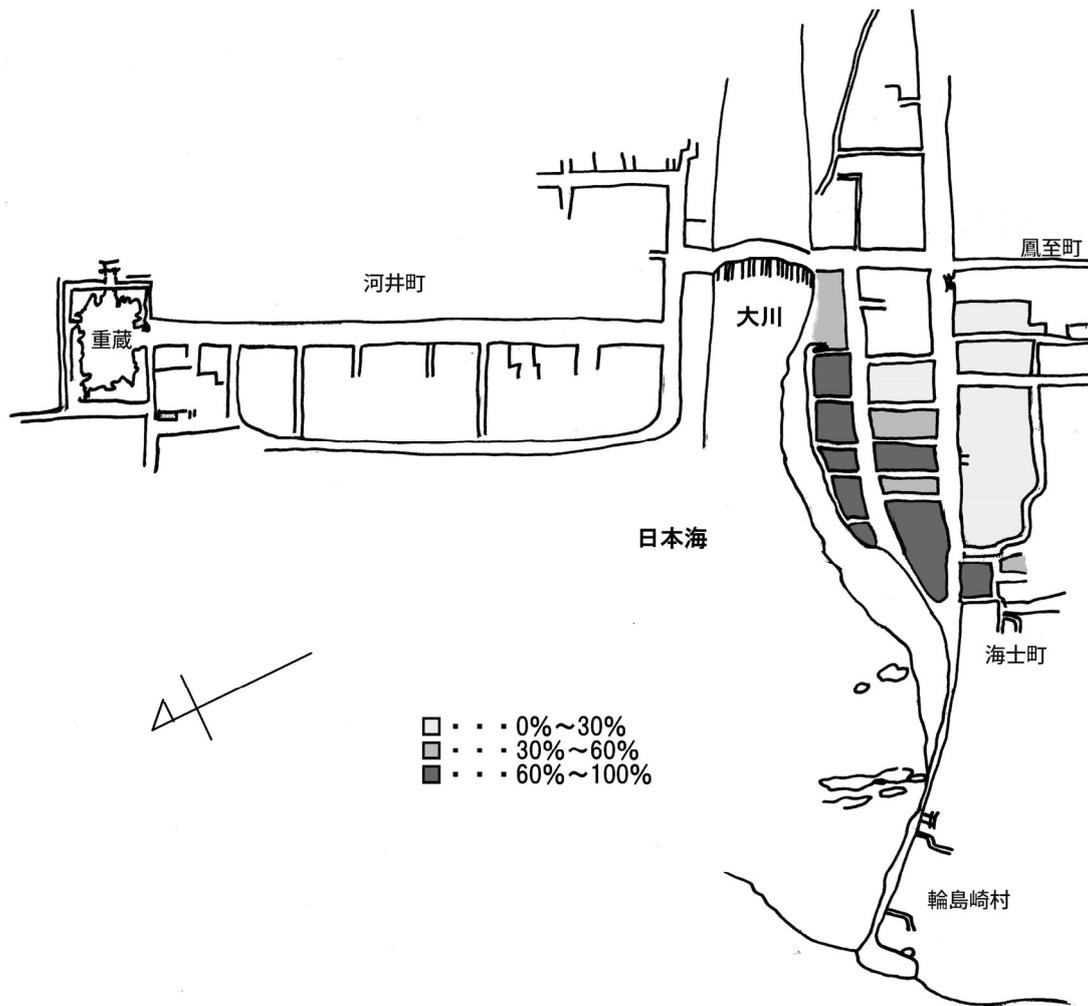


図2 鳳至町被害状況

The damage area by the 1833 tsunami in The Fugeshi Town.

(註1)(住吉 S-1号)のトレース図, (住吉 S-6号, G-96号, G-98号, G-106号)から作成した. 図中の%は被災者÷一区画に居住する人数, で算出した.

(註2)河井町・海士町・輪島崎村については史料の制約から%は判明していない.

(註3)(住吉 S-1号)には年代の記載がなく, 絵図内部の記述から宝暦以降に作成されたものということが判明する. しかし, (住吉 S-1号)と(住吉 S-6号)を比較すると, S-6号(天保四年に作成)に見られる住民が同位置に S-1号にも居住している. このことから, S-1号, S-6号ともに天保四年, もしくはその前後数年の間に作成されたものと考えることができる. また, S-6号は津波の被害状況を記録した絵図であるが, この S-6号と S-1号に記載住民の違いがない(津波の被害が反映されていない), このことから S-1号は S-6号より以前に作成されたといえよう.

図2に見られる鳳至町域には住吉神社文書に残された絵図に, 貸米をはじめ何らかの救済措置を受けた者の居住地を, 地域の居住人数に対する割合で表した. 先にあげた資料1にもあるように, 津波は北東方向から輪島町を襲い, 大川を逆流した. この津波によって, 大川にかかる大橋も崩落し, その修繕の費用が計上されている(住吉 G-109号). 資料1による

と, 津波は大川を約1km逆流しており, 大橋も正に河口から1km付近に掛けられている. また, この図2に表れた罹災率60~100%の地域も, 同様に川が逆流した範囲であることが理解できよう. 更に, 鳳至町に発生した溺死人は全て罹災率60%~100%の地域に在住していた者達であり, このことから, 特に鳳至町の津波被害の様相が判明する.

さらに、この図 2 から、貸米などの救済措置は津波災害を被った者に限られて施行されたことが理解されよう。

3.2 河井町被害地域の確定

次に、輪島町の中では比較的被害の少なかった、河井町の被害地域の確定を試みたい。史的な制約もあり、鳳至町のように救助対象者という条件までを含めた検討はなしえないが、被害地域のある程度の確定は残された史料から可能である。

図 3 は、地震発生後、その被害状況を確認するために作成されたと推測される絵図である。その絵図の中に次のような記述がある。

資料 3 (住吉 S-6 号)

浦濱通町西ヨリ東迄百式拾壱軒表通背戸蔵半分波上り損ジル
本町通五拾五軒借家有波壱尺斗上ル家表口皆損シ不申

この「浦濱通」「本町通」とは、重蔵宮との位置関係などから、現在の海岸通り、朝市通りだと判明する。

現在この二本の通りの間隔は約 100m であり、天保四年の時点でも大きな違いはなかった。近世、河井町はこの「本町通」と門前、裏町など、海岸に並行する大通りと、その間を結ぶ小路を中心として住宅が密集しており、多くの貸家も存在していた。河井町では資料 3 にあるように、海に面した 121 軒に損壊の被害があり、内陸部にある家々には、40cm 程度の波が襲ったが、破損などの被害は無かったようである。また、表 1 に示した河井町の流出軒数と、資料 3 に見られる被害軒数に差異が見られるが、これは資料 3 が、津波による被害に限定せず、流出被害、家屋損壊など何らかの被害を受けたものを表記しているためであろう。

この鳳至町・河井町間の被害格差は、河井町沿岸に砂浜が広がり、津波の力を弱めたこと、そして津波が到来した方角にその要因が求められる。けれども津波の波高、力には、海底地形など、なお視野に入れなければならない情報が数多くある。この両町の被害格差については以降検討を重ねていきたい。

これまで述べてきたように、輪島町は津波によって甚大な損害を被った。この被害に対し、藩は、貸米に代表される救済措置を、また村内部でも富裕な商人による見舞いの品が地震直後から被災者に配布され、

住人による施行も数多く行われた(住吉 G-94 号)。そのような施行行為を行った者達の中には、この地震で被害を受けた者も存在した。このような富裕商人による施行の実施は、町という場における、彼らの社会的役割と位置づけられる[北原(1995)]。

また、生き残った人々の当面の生活維持、また日常生活への復旧の他にも、流れ着いた溺死体の処理、大橋の修理など、地震発生直後から復興に向けた問題は山積していた。

さて、地震・津波発生直後、住民は津波を回避すべく、高台へ避難した。(住吉 G-112 号)等には「(前略)地震仕引続是迄も不覚殊之外引汐仕候ニ付、ヶ様の節ハ津波立可申与兼而聞伝御座候ニ付、家内不残逃登候(後略)」とあり、地震に続いて「引汐」が発生した時には津波が起こると、昔から言い伝えられ、この地震の際にも家中で津波から避難したことが知られる。

また史料中に「逃登」とあることから、住民達は津波被害を避けるため、高台へと避難したことが理解される。この資料にあるような記述から、地震発生時の人々の様子が理解できるが、この、地震の後に引き潮、そして津波の到来、という認識が住民にあり、いち早く避難が開始されたため、津波による被害はある程度軽減されたのではないだろうか。このような、津波からの避難という経験の蓄積、そして子孫への津波被害とその回避の伝承も海辺の町に形成される特色のひとつといえる。

「応響雑記」(「加賀藩史料」)の記載によると、避難した住民がそれぞれの自宅へ戻り始めたのは地震発生から三日後の十月二十八日のことだった。この日から、輪島は復興への道を歩みだすことになるが、では、この天保四年羽前沖地震被災者の災害後の生活はどのようなものだったのであろうか。

§ 4.被害からの復興—「港町」としての輪島の特性—

(住吉 M-10 号)には、天保四年羽前沖地震から 10 年後、1843 年(天保十四年)の鳳至町に居住する百姓・頭振の諸職業が人名ごとに記される、「諸商売并家内人数相調理書上申帳」という史料が残存している。この(住吉 M-10 号)には、天保十四年時点で鳳至町に居住する全ての人々が職業とともに記録されている。この史料にあらわれる人名と、津波による貸米・救米給付者及び小物成一年用捨など救済措置を受けた人々を照合し、表 3 にまとめた。表 3 は紙幅の関係から、鳳至町全戸数の 10% 程度を抜粋したもので

あるが、おおよその傾向は理解することができるだろう。この表 3 によると、天保四年羽前沖地震被災者の実に 73%が、地震後 10 年を経ても輪島に居住し続けていることが特定できた。また彼らが持つ屋号、例えば「真酒屋」、「鍛冶屋」なども、ほとんどの被災者に変化が見られないことから、津波被災後も被災前と同様の職に就いていたと推測できる。

このことは、地震の被災者達は自らの住居や町、ひいては自分たちの持つ生業が災害によって破壊されてもなお、輪島の町に留まり、そこで町を復興することを選択したと言い換えることができるだろう。

天保四年から天保十四年までは、10 年が経過しているため、(住吉 M-10 号)に見られる人名は天保四年羽前沖地震の直接の被害者ではない可能性もある。

しかし、10 年という時間経過では、町内全員の代が入れ替わることは考えられないため、(住吉 M-10 号)に表れる居住者は、天保四年羽前沖地震の直接の経験者、もしくは子など、ある程度近接する関係の者であったと考える。

表 1 に見られるように、部分的にはあるが、家屋、土蔵などが壊滅的な被害を受けたこの災害を乗り越え、人々は何故輪島の地に住み続けたのであろうか。この天保四年羽前沖地震のような、莫大な被害を収束させる力を持った「町」の性格はどのようなものであったのだろうか。そこで、輪島町の持つ特色を明らかにするため、表 4、5 を掲げた。

表 4 は、前出の「諸商売并家内人数相調理書上申帳」から作成した。この表 4 に見られるように、近世輪島の主な産業は献上品でもあった素麺と漆器(輪島塗)の生産と、それに関わる様々な種類の生業であった。この他に、船舶が出入りする港町に多い鍛冶屋、船問屋、船大工、更にそれら諸職業を持つ人々の日常生活のための商店など、様々な職業を持つ人々によって輪島の町は形成されていた。さらに、中世から「三津七湊」や「ヲヤの湊」と称され、良港の呼び声が高かった輪島の様子は、表 5 にあげる船舶の出入港の状況からも把握できる。

表 5 は 1656 年(明暦二年)、1671 年(寛文十一年)の河原田組各村に賦課された、外海船權役と潤(うるま)役を表したものである。外海船權役とは、その村や町に居住する者が所持する船舶に掛けられた税金であり、この額は水主八十一人分の税額にあたる。潤役とは、港に出入りする他国の船に課税される入港税であった。この表 5 によると、明暦二年という近世のかなり早い時期から、輪島には年間約 600 艘もの船

浦濱通町西ヨリ東迄百式拾参町表通戸蔵半分波上り損シル 死人凡六十人未死骸見附候分御口(注カ)進無之跡より上り候分御注進

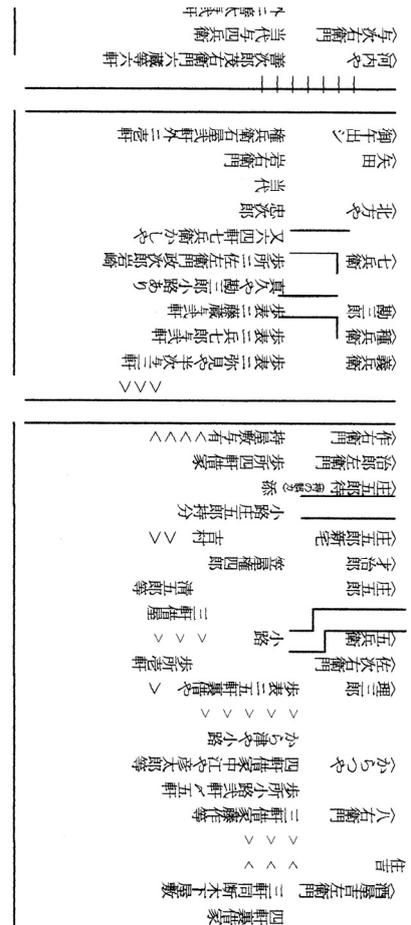


図 3 河井町被害図

The damage area by the 1833 tsunami in Kawai Town.

(註 1)(住吉 S-6 号)から作成。本図は史料の一部分を表したものである。

船が出入りし、活発な商活動が行われていたことが理解できる。また、村内部にも多数の船舶が存在し、船持が運賃積み、買い積みなど様々な手段をとって、経済活動を行っていたことが知られよう。能登半島は日本海に張り出した「止まり木」と呼ばれるその地形からも、松前から赤間崎を経て大坂に向かう、日本海海運の重要な中継地点であった。輪島の日本海海運における役割については、多くの先行研究があるのでここでの詳述は控えるが、中世から、陸上交通に輸送の大部分が転換する近代中期まで、輪島は日本海において非常に重要な役割を担う港町であった[例えば、網野(2000)、泉(2001)]。

このような「港町」、言い換えれば「港湾都市」としての輪島の状況からは、耕作地や濱など自然から自らの食料、商品など生活の糧を得るのではなく、諸商売や、工業など町場特有の生業を持ち、海を生活の場として生きた人々の姿が浮かんでくる。

表3 津波被災後の居住者状況
The citizen of Fugeshi machi after tsunami.

天保四年 輪島地震被災者 (1833)	天保十四年 「諸商売并家人内人相調理書上申帳」 (1843)	職業	家内 人数	家内津波被害者
紙屋義左衛門	紙屋 義左衛門	素麺・米批売	8人	
熊野屋権右衛門	---			
石屋清次郎	---			
酒屋重兵衛	---			
中上屋八郎右衛門	中上屋 八郎右衛門	米批売・船問屋	1人	
真酒屋清吉	真酒屋 清吉	鍛冶	2人	
長八	濱ノ 長八	塗師職人	2人	
津兵衛	浜井屋 津兵衛	塗師商売	7人	
□次屋才三郎	鍛冶屋 才三郎	塗師職人	8人	
久保屋諸兵衛	久保屋 諸兵衛	素麺・賃餅搗屋	5人	
中居屋吉右衛門	中居屋 吉右衛門	素麺・塗師職人・餅搗屋商売	3人	
又十郎	おんば 又十郎跡	日雇	3人	
小池屋平三郎	に(カ)いち 平三郎	塗師商売	2人	
弥三郎	木地屋 弥三郎	形はつり	3人	
□□屋長四郎	濱崎屋 長四郎跡	洗濯仕	1人	
新屋宋兵衛	新屋 宗兵衛	塗師職人	3人	
小橋屋勘兵衛	---			
勘十郎	勘十郎	塗師	1人	妹1人,娘1人溺死
太十郎	小伊勢屋 太十郎	木地商売	7人	
三蔵	[] 三蔵	桶師	4人	
又太郎	仲屋 又太郎	塗師商売	6人	
藤四郎				
石屋覚兵衛	石屋 覚兵衛	石切・素麺	5人	
□次屋佐左衛門	鍛冶屋 佐左衛門	鍛冶	2人	
増右衛門	増右衛門	日雇・手舟稼	3人	本人溺死
船木屋才兵衛	船木屋 才兵衛	船大工	8人	
□次屋助次郎	鍛冶屋 助次郎	鍛冶	6人	
□次屋茂左衛門	鍛冶 茂左衛門	鍛冶	3人	
□次屋理兵衛	鍛冶屋 理兵衛	素麺商売	4人	
四十物屋清五郎	四十物や 清五郎	古手・四十物商売	8人	
坂下屋久兵衛	坂下屋 久兵衛	素麺・木地	5人	
作左衛門	横川屋 作左衛門	素麺并米批売	5人	
白壁屋孫左衛門	白壁屋 孫左衛門	塩仕稼	3人	
阿路屋松右衛門	---			
蕨野屋市右衛門	蕨野屋 市右衛門	金沢通江出[]	3人	
表具屋十兵衛	---			
仲屋佐兵衛	---			
濱伝屋長次郎	---			
林屋藤七	林屋 藤七	鍛冶	5人	
又四郎	おんば 又四郎	古手古かね・草履わらし	5人	
大津屋伊左衛門	大津屋 伊左衛門	塗師職人	5人	
船木屋理三右衛門	船木屋 理三右衛門	船大工	8人	
天野屋仁兵衛	天野屋 仁兵衛	質物預り・素麺	5人	
坂下屋久五郎	---			
横屋忠左衛門	---			
船木屋重左衛門	---			
橘屋庄五郎	---			
山田屋七助	山田屋 七助	古手・塗物・小間物商内	4人	

(註1)(住吉 G-115号),(住吉 G-121号),(住吉 G-124号),(住吉 M-10号)から作成,抜粋

(註2) ---部分は天保十四年時点で輪島での居住が確認できなかった者である

表 4 鳳至町頭振職業一覧

The list of jobs in the Fugeshi Town in 1833

職	業	軒数	職	業	軒数
塗	師	84	木	挽	11
塗	師	1	板・たる	木	2
木	地	20	暈	指	2
木	地	5	石	切	6
木	地形	12	桶	師	9
地	之	1	桶	師	1
蒔	絵	2	指	物	17
沈	金	1	曲	物	1
漆	商	4	桃	灯	2
塗	物	1	鍋	鑄	1
素	麵	6	反	物	3
賃	麦	10	賃	糸	25
鍛	冶	20	古	手	3
鍛	冶	1	洗	濯	2
米	秕	1	織	草	3
く	だ	1	紺	屋	1
蕎	麦	1	髪	結	5
鱈	商	2	猟	師	1
団	子	1	塩	師	2
室	商	1	医	業	3
菜・大根等	青	2	座	頭	1
豆	腐	2	他	村	5
餅	搗	1	奉	公	11
旅	人	2	日	雇	72
飛	脚	2	幼	少	5
船	問	1	跡		37
船	方	2	無	記	11
船	大	3	計		465
家	大	33			

(註 1)(住吉 M-10 号),及び泉雅博『新しい歴史解説の視座を求めて』,178pより抜粋して作成した。

当然のことながら,海は漁場であり,また塩など海からの商品を生産する場であった。そこには入会地,漁業権など,海山に権利と生活の基盤を置いていた人々も多く存在した。そのような海に生産を依存し,少なからず自給自足を伴った生活を維持しようとした場合,津波による被害は,生産と食糧自給の場を直撃し,村落そのものの存亡に関わる問題となった。しかし,輪島において海は生産の場ではなく,あくまでも交易の場であり,外部とのつながりを維持する道としての役割を担うものだったのである。それは表 4 に

表 5 河原田組における外海船權役と潤役

The harbor dues of Wajima port in 1656 and 1671

町 村 名	1656(明暦二年)		1671(寛文十一年)	
	外海船 權役(匁)	潤役 (匁)	外海船 權役(匁)	潤役 (匁)
輪嶋崎村	63	4207	56	3922
小田屋村	84	—	119	—
尊利地村	98	—	126	—
輪 嶋 町	567	—	1473.5	—
名 舟 村	245	—	98	—

(註 1)輪島市史資料編第一巻「明暦二年 新四郎組村御印写」,(住吉 D-16 号),「永代町方定規矩帳」から作成。なお寛文十年の輪嶋崎・小田屋・尊利地・名舟の各村については,和泉清司「近世前期日本海における地廻り海運の展開と流通」中の資料を参照した。

(註 2)一部は課税されていない地域である。

あらわれたように,商工業を中心とする人々の職業からも見て取れよう。人々は商品の材料を,他の土地から海を通じて運び入れ,完成した商品は海を通じて輸送した¹。また,この地域に展開する様々な職業は,輪島が港町として機能するために必要な商業や工業を中心としたものであった。そのような港町としての特性が,災害という異常時,そして復興の過程にも現出したのである。

輪島は先述したように,中世から続く日本海海運の重要な一拠点であり,藩にとっても,そこからもたらされる様々な物資,金銭,情報などは非常に重要な位置を占めていた。そのため,藩もこの災害に対し,貸米・救米計 551 石,またそれらに対する浦口銭(船の入港に際し徴収された税)免除等の特例措置を取る。それは,言い換えれば,輪島という場が,海陸の道を通じて人と物を吸収する力を持ち,近世の地域社会,更には藩政においてそのような装置としての役割を担っていたからに他ならない。

表 3 にあらわれた,災害後も輪島に留まり,町を復興させた者達の様相は,人や物資を集約させる力を持った,輪島の港町としての性格が多分に影響を及ぼしたのだと考える。

さらに付け加えるならば,この天保四年羽前沖地震の翌年,河井町 709 軒のうち 704 軒を焼き尽くす火災が発生するが(「加賀藩史料」),その後も輪島は同

¹ 例えば,岡山県笠岡市真鍋島真鍋礼三家には,近世に購入された輪島塗の漆器が大量に保存されている。

様に復興し、現在まで続く日本海の港湾都市となる。

§5. むすびにかえて

災害からの復興は「災害という異常事態から通常の社会的日常を回復するまでの社会の総過程」とされる[北原(1995)]. では、そのような過程を経、異常事態を収束させる「場」とはどのようなものであったのだろうか。本稿ではそのような疑問に端を発し、異常事態を許容する「町」という場のあり方を描きだすことを目的に論を進めてきた。

災害とは、連綿と続く日常生活を断裂させ、否応なしに社会の一部を起点にまで押し戻す莫大な力量を持つものであった。しかしながら、それはまた、日常の中で成立していた様々な慣習や構造を、我々に明確な形で露呈させる、日常の断層ともいべき事態だったのである。本稿では、この天保四年に発生した地震被害とその復興の有り様を、輪島という地に限定し叙述してきた。しかし、実際には、この地震は、越後、佐渡など広範囲にわたり甚大な被害を及ぼしている。これら諸地域の様々な被害状況を比較することで、地震被害そのものをさらに深く理解することができるだろう。

また、本稿での検討は輪島町内部という、狭い範囲を微視的な視野で検討するという方法を取り入れた。それは、とすれば、時間的、空間的に広い視野を失う危険があることを十分認識しなくてはならない。地震、津波被害は、一つの地域のみで完結するものではないことは自明のことであり、藩による救済措置や、災害が藩政に及ぼす影響、そして加賀藩独自の災害からの復興システムのあり方など、問題は歴大な史料とともに山積していると言えよう。

謝辞

住吉神社文書、天保四年羽前沖地震関連文献の閲覧に際しましては、輪島市教育委員会の砂上正夫氏に、輪島地域の地質、歴史的な地殻変動などについては産業技術総合研究所つくばセンターの小松原琢氏に多大なるご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

また、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、北原糸子先生をはじめ、歴史情報学特論履修者の皆様には貴重なご意見を頂きました。ありがとうございました。

なお、住吉神社文書は、神奈川大学日本常民文化研究所にもマイクロフィルムが所蔵されています。

こちらにも快く閲覧を許可して下さいました研究所関係者の皆様に御礼申し上げます。

文 献

- 網野善彦, 2000, 日本とは何か, 講談社.
- 泉雅博, 1990, 能登と廻船交易 : 北前船以前, 海と列島文化第1巻 日本海と北国文化, 小学館.
- 泉雅博, 1993, 新しい歴史解読の視座を求めて, 神奈川大学評論叢書第2巻 歴史解読の視座, お茶の水書房.
- 泉雅博, 2001, 能州馬縹浦と日本海交通一狩野家伝来『船客帳』の分析を中心に一, 跡見学園女子大学紀要.
- 和泉清司, 1998, 近世前期日本海における地廻り海運の展開と流通, 近世史研究叢書3 近世の流通経済と経済思想 第三章, 岩田書院.
- 梶原修一, 1989, 輪島市災害史覚書.
- 北原糸子, 1995, 都市と貧困の社会史, 吉川弘文館.
- 北原糸子, 2000, 地震の社会史, 講談社.
- 前田育徳会, 1981, 加賀藩史料 第14編.
- 牧野義照, 1990, 輪島の天保騒動, 輪島市教育委員会住吉神社文書予備調査報告書.
- 萩原尊禮, 1982, 続 古地震一実像と虚像一, 東京大学出版局.
- 大林綾, 2005, 加賀藩における難船処理に関する一考察, 対話する歴史と民俗-歴史民俗資料学のエチュード-, 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科編.
- 佐古隆, 住吉神社文書から一天保四年の輪島一.
- 震災予防調査会, 1973, 大日本地震史料, 思文閣, 595p-596p.
- 震災予防評議会, 1976, 増訂大日本地震史料 第三巻, 鳴鳳社, 402p-410 p.
- 東京大学地震研究所, 1986, 新収日本地震史料第4巻, 611p, 693p-695p.
- 東京大学地震研究所, 1993, 新収日本地震史料続補遺, 595p-612p.
- 宇佐美龍夫, 1987, 新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会, 108p-110p.
- 宇佐美龍夫, 1996, 新編日本被害地震総覧[増補改訂版 416-1995], 東京大学出版会, 107p-109p.
- 輪島市史編纂専門委員会, 1978, 輪島市史 資料編 第1巻.